

神戸大学名誉教授 石井淳蔵氏 弔辞

加護野忠男さん、それにしても長い月日がたちました。加護野さんとお会いしてから、60年になります。神戸大学の教養課程、1年生の語学クラスで一緒になりました。経営学部では、ABC順に学籍簿が作られていて、そのクラスには、I、J、Kの頭文字を持つ学生が集まっていました。加護野さんや私の神戸大学の友人に、I、J、Kの頭文字を持つ学生が多いのはそのせいです。

入学したばかりのころ、大学から阪急六甲まで、トコトコと歩いて帰るその途中に喫茶店があり、そこによく立ち寄りました。インテリアのおばあちゃんがやっておられて、そのカウンターの席に腰を掛けて、加護野さんや、他の2、3人の友人と、長い時間、飽きることなく話をしたことを覚えています。講義できいたばかりの、バーナードやサイモンの理論、あるいは当時学生に人気が高かった、高橋和巳氏の小説などが話題になったことを覚えています。本を読む、学ぶ、議論する。こうしたことの面白さを知った、最初でした。

その後、専門課程に進んでも、お付き合いは続きました。何人かの友人らとスキーに行ったり、麻雀をしたり、将棋会館で将棋を指したり、飲みに行ったりと、学生生活を満喫いたしました。学部を卒業してからは、二人で大学院へ進みました。経営学とマーケティングに分野は分かれましたが、帰り道に、阪急沿線の十三や淡路駅近くの立ち飲み屋で一杯やったりしながら、お互いの研究について語り合いました。大学院では、二人で松田和久先生に統計学を、田村正紀先生に定量研究を、個人レッスンのようなかたちで教えてもらったことを覚えています。また、野中郁次郎先生のアメリカでの博士論文が手に入って、経営学とマーケティング論が合併したような、こんなテーマが成り立つんやろうか、と二人で話し合ったことを覚えています。自分で新たな研究テーマを考え、それに見合った方法論を構築する、そうした研究の基礎的なトレーニングを、加護野さんと一緒に積むことができたことは、私の人生にとって、かけがいのない財産となりました。

教員同士としての話を最後にいたします。1989年、私は同志社から神戸大学に戻りました。加護野さんからの、「戻ってきたら」という一言に、背中を押してもらいました。同時に、「神戸大学では、研究業績を出すだけではあかんで、学界のパラダイムを作らんとあ」と、プレッシャーもかけられました。そのころはちょうど、大学院の変換期で、ビジネススクール作りが進んでいました。その時、加護野さんの掲げられた旗印は、「ビジネス・インサイト」でした。その旗印のもと、働きながら学ぶ、理論と実践の融合、リフレッシュ教育といった方向性が打ち出されました。今はともかく、当時は誠に斬新なものでした。MBAと軌を一にして、Phdコースの整備も、加護野さんを中心に進みました。加護野さんは、研究者になりたいと思う人は誰でも研究者になれる、そういうことを目指しておられたように思

います。

また、「知」を権威化してはいけない、という思いもお持ちだったと思います。研究の価値を深く理解される一方で、研究？それ一体なんぼのもんや、という思いもお持ちだったように思います。それ一体なんぼのもんや、というのは、大阪商人の実利意識の表れでもあります。まさに、理論と実践の融合です。神戸大学経営学研究科におけるこうした改革は、私にとっては非常に良い経験になりました。研究者として、教育者として、新たな目標を与えられました。改めて考えてみると、大学院受験から始まって、ずっと目標を与えられてきたように思います。私には、この上ない友人であるとともに、人生の先達でもありました。

加護野さんは晩年、日本型経営の思想の啓蒙に力を入れておられました。日本型経営を考えることは、自分自身を問い直すことでもあります。加護野さんからの最後の宿題として、私もこの問題に取り組んで行きたいと思っています。

加護野さん、本当に長い間お世話になりありがとうございました。御礼の言葉しかありません。ご冥福をお祈りいたしたいと思います。